月刊

こころのとも

第六巻
七月号

物を粗末にすると

物を
粗末にすることは
生命を
粗末にすること
生命を
粗末にすることは
人を
粗末にすること

なぜ二つの感謝か

させていただいて
ありがたいのは
それが
私の生き甲斐になるから

していただいて
ありがたいのは
それが
私の助けになるから

人生を考え直して みたい人は（十九）

―『老子』解説（十八）―

今月号は、先月号が第七十三章でしたので、前後しますが、第七十一章を取り上げます。

（第七十一章）知らないということを知っていることが、最上です。知らないのに知っていると思うのは、精神としては十全ではないのです。しかし、十全ではないことを十全でないと自覚できていれば、十全であると言えるのです。

聖人には、精神が十全でないということがありません。前述のように、十全でないことは十全でないと自覚しているから、十全でないということがないのです。

この章も、深い真理を含み、とても難しいようです。私の読んだ本で、正しく解釈できている本は一つもありません。みんな間違っています。どの本がどう間違っているかは、論文ではありませんので省略し、以下、私が感じ、考える解釈を述べて行きます。

さて、この章を理解するのに、キイワードとなることばが二つあります。一つは「知る」で、もう一つは「十全でない」です。もともとの老子の原語は、前者はそのまま「知」ですが、後者は「病」です。この病はとても訳しにくいことばで、日本語のように単に病気とか病んでいることだけを意味するわけではありません。私も、大修館書店の『広漢和辞典』で調べてみましたが、多くの訳語の中にもぴったりするものがありませんでした。そこで、私なりに「十全でない」と訳してみました。これらのことばがどんな意味なのか、順次、本文と共に解説して行きたいと思います。

まず出だしの「知らないということを知っていることが、最上です。」という部分ですが、これを読んで私は、ソクラテスの「無知の知」を思い出しました。内容は全く同じことを言っていると思います。

私の読んだ全ての解説書が、この知を「もの知り」とか「知識」の知と考えています。そう考えますと、この文章は「知っているけど、謙遜して、知らないと思ったり、知ったかぶりをしない」といったきわめて処世的で「俗」なことを言っているということになります。そうではないのです。これは、もっと「聖」なことを言って

いるのです。

私のモデルで言います、この知は「認知－言語（あたま）」の働きとしての知識、知能のことではないのです。

それは、私のモデルで言いますと、無意識について言っているのです。無意識に宿した神や仏のことを言っているのです。それを知らないことを言っているのです。しかし、無意識の神・仏（如来蔵識）を、普通の意味でいう意識として、知ることはできません。意識して知ることができるのは、意識の領域のことだけなのです。無意識は、意識を超えたところに現れてくるものです。ついでですが、意識の超え方には、仏教では、坐禅（曹洞禅）のようにこころを空にしてひたすら坐るような方法もありますし、真言密教のように身口意（しんくい＝からだ、あたま、こころ）を統一して、仏と我が「入我我入」し、即身成仏に至るような方法もあります。

ともかく意識を超えた無意識を知ることは、普通の人では体験することができません。「ひたすら修行する」人のみが体験することができるのです。

ですから、こうした無意識の体験のない人に「無知の知」を言ってみても理解できる人は殆どいないのです。ソクラテスで言いますと、優秀な弟子であったプラトンでさえ理解できていませんし、また老子で言いますと、これまでの学者で老子を正しく理解した人に、私は出会っていないのです。

この「無知の知」を仏教のことばで言いますと、「無明の知」、つまり無明にいることを知るということになると思います。私のモデルで言いますと、無意識の生命蔵識と如来蔵識とが統合できていないとき、無明にいるのですが、そのことを知るということになります。そして、無明にいるとき意識の世界は「虚妄」であるということになるのです。知識として知っていると思っていることは、真の知ではないのです。それはどこまでも相対の世界のことですから、相対な知なのです。いつでも変わる可能性のある知なのです。ですから、そんな知識をいくら増やしても、真の知に至ることはできません。知識を得れば得るほど、自分は知っているという執らわれ（執着）を増やしてますます傲慢になり、無明にいることに気付けなくなり、いわゆる無明の闇をどこまでもさまよって行くことになるのです。

普通、難関の大学や学部に進学し、高等教育を受け、自ら読書し、高い学問（科学）や文学・芸術などの豊かな教養を身に付ければ、精神的に高尚になって行くと考えられます。しかし、それは真の知からはかえって遠ざかって行っているのです。

それが、第二のキイワードの精神が「十全でない」ということなのです。つまり、本文にありますように「知らないのに知っていると思うのは、精神として十全ではないのです。」ということになるのです。

普通は精神的に高まっていると考えられることが、実は、真の知をもたらす無意識の統合という点から見ますと、ますます遠ざかって行っているとは皮肉なことです。

しかし、この皮肉な真実に気付ける人はほとんどいません。この解説を読んで、たとえ理屈として「あたま」で理解できたとしても、無意識のうちに、あるいは、こころの底からそうした知識が単に人間性（人間としての真の完成）をスポイルするだけのものであると思える人はめったにいないのです。まして、そう聞いたから、では、無意識を開発して真の知に達しようとする人に至ってはなおさらのことです。

このことを本文で述べたのが、次の「しかし、十全でないことを十全でないと自覚できていれば、十全であると言えるのです。」という部分です。

はじめから、自分が勉強するほど（自分がお金持ちになるほど、自分が偉くなるほど、自分が有名になるほど、自分の地位が上がるほど）自分が非人間的になって行っていると思える人は滅多にいませんので、大切なことは、老子のこの解説を読み、老子や私を信じて、ひたすら修行して頂くことです。毎日毎日、ひたすら修行して行くことなのです。

そうしているとき、限りなく十全な精神に近づいているのです。既に、十全であるといってもいいのです。

本文の最後の「聖人には、精神が十全でないということがありません。前述のように、十全でないことは十全でないと自覚していますので、十全でないということがないのです。」という部分ですが、少しだけ敷衍（ふえん）しておきます。

既に述べましたが、この世は相対の世界です。縁起の世界です。諸行無常の世界です。限りなく移り行く世界です。唯識という仏教の思想でいいますと、「虚妄（こもう）」の世界なのです。また、心理学的に言いますと、「流れ行く意識」の世界なのです。

こうした、うつろい行く世界に精神的に定位していますと、いつまでたっても真の安心は得られません。自分の心もうつろってしまうからです。不安定になって行かざるを得ません。それを避けようとしますと、多かれ少なかれ、オウム真理教のように自己を絶対化して行かなければならなくなってしまうのです。これほど非人間的なことはありません。

自作随筆選

幼児虐待

（平成七年二月十九日作）

アメリカへ旅行していて、幼児虐待で逮捕された日本人夫婦のことが、数日前ニュースになりました。

それは、買い物のために赤ん坊（生後十ヵ月（？）の子）を車の中に少なくとも四十分間残していたために逮捕され、罰金と三年間の保護観察処分になったというものです。判決後、記者会見で父親が、「子どもは親が責任をもって育てるので、国家が介入するべきものではない」と言ったそうです。

このニュースを聞いて、私は驚きました。この夫婦がどんな目的で赤ん坊を連れてまでアメリカ旅行に出掛けて行ったのか、つまり単なる観光なのか、何か仕事とか、付き合いのようなのっぴきならない事情によるものなのか、よくわかりませんが、このことすらが先ず、私には考えられないことのように思えるのです。何にしても、このニュースは何かと考えさせられるものを多く含んでいるように感じます。そのことを少し述べてみたいと思います。

私も、アメリカでは、幼児虐待が増えていることは知っていたのですが、それを防止するために「幼児虐待防止に関する法律」が制定されていて、虐待すればその法律で逮捕されるのだとは知りませんでした。私には、そのことがまず、とても異常に思えるのです。

確かに、記者会見で父親が言っていましたように、子育ては親が責任をもって行うのが当然なのです。なのに、それを法律で規制しなければならないところにアメリカ社会の病理性があると思うのです。

でも、この父親のように、自分が幼い子をアメリカまで連れていき、そのあげく車に放置しておきながら、子育ては親が責任をもって行うもので、国が介入すべきものではないとうそぶくのも、とても自己に閉じていて、自分のしていることに気付いていないように思えます。

このところ日本でも、車に幼児を閉じ込めて買い物をし、帰ってみたら死んでいたというニュースがときどき報道されます。私には、こんなことはとても考えられません。親として考えられないことをしておきながら、親が責任をもつとは、この人もアメリカ人と同じ穴のムジナと言えます。

では、なぜ、こんな社会病理が起こるのでしょうか。理由を考える前に、社会病理の実態について少しみて

みたいと思います。アメリカにおける社会病理の実態を示すものとして、いま刑務所がパンク状態で、収容能力の一五〇％にも達しているということがあげられます。船を急きょ刑務所に改造して対応したりしているようです。特に急増している受刑者は、麻薬関係の犯罪者だと言います。この危機を乗り切るために、まじめに麻薬の自由化さえささやかれているそうです。また、麻薬のような薬物依存と似たものに、アルコール依存症の増加があります。特に、高校生や大学生のような若年の依存症患者が急増していると言います。でも、アルコールは成人なら犯罪にはなりません。ですから、麻薬をアルコールと同様、自由化しようというわけです。でも注意しなければならないのは、アルコールは必ずしも依存症にはなりませんが、麻薬は必ず依存症になり、身も心もむしばんで行くということです。

この他にも、社会病理を示すものとして、エイズの流行、同性愛者の増加、離婚の常態化、大衆のピストル所持、殺人や強姦など凶悪犯罪の増加、等々があります。

このまま行きますと、アメリカ社会はこうした病理のために崩壊に至るのではないかとさえ思われます。またこれは、何もアメリカだけではなく、少し遅れて日本もその後を追っているように思えるのです。

さて、この原因ですが、私は、それは現代社会の行き過ぎた個人主義、自由主義、合理主義にあるように思われるのです。なぜなら、こうした主義がはびこる社会では、社会（他者）よりも一人ひとりの個人が尊重されますし、無意識に潜む「聖なるもの」よりも意識のなかの「あたま」や「からだ」が尊重されます。そして、こうした傾向をもつ人々の精神的風土は、必然的に聖なるものと密接に結びついている意識の中の「こころ」それも「人の心を感じるこころ」の生育を阻む結果をもたらすのです。

そうなりますと、多くの人にとって自分の欲望の追求が人生の最大の幸せ、最大の目標になってしまいます。自分の、あるいは自分の仲間（家族、友人、会社、国、民族など）の、衣食住などの経済的欲求の追求、他者より優れたい、他者を支配したいという優越欲求の満足、性的行為においては人間的つながりよりも性的欲望の無制限な追求、などが重要となってくるのです。

そして、こうした傾向が強まるほど、人間は他者が信じられなくなり、自己に閉じ、ピストルで武装し、精神的健康を失って、自分の子さえ虐待し、薬物やアルコールに頼るようになってくるのです。

世界中の人が他己を取り戻すよう願って止みません。

自作詩短歌等選

子育ては精神全て

いま
母にとって
子育ては
楽しみではなく
自己に負担をしいる
義務に
変わっている
子どもは
うるさいもの
自由にならないもの
しかし
ペットのように
自分の都合で
可愛がるもの

いま
赤ん坊が
笑わなくなっている
それは
家庭内ホスピタリズム
母性行動欠如
のあらわれ
いま
母親向け雑誌が
よく売れている
それは
子育て文化
伝承欠如の
あらわれ

でも
子育ては
精神全てによる
人間的係わり
それは
自分を犠牲にした
他者への
サービス精神
そのもの
人の心を
感じるこころ
そのもの

雑誌を読んで
あたまで
伝わるものではない

問わずもの語り

きいてもいないのに
一人で
ぺらぺらしゃべる人

頼んでもいないのに
勝手に人の話に
くちばしを差しはさむ人

そんな人を
問わずもの語りという

マスコミの社会正義

社会正義を
売り物にするはずの
マスコミが
社会正義を
踏みにじる者に
弁明の機会を
何度も
何度も
与えている

そこにあるのは
好奇心だけ
視聴率だけ
儲けだけ
アナウンサーにも
司会者にも
ディレクターにも
キャスターにも

人が怖いもの

人が
失うのを
怖がるものは
世間
と
生命

でも
それを克服しないと
本当の幸せは
こない

露の玉

雨上がり
やつでに光る
露の玉

自らにはたらく力

自らの
力を超えて
自らに
はたらく力
知るときに
敬うこころ
起こりくる
信じるこころ
起こりくる
宗教心が
わきい出てくる

辛と幸

苦しくも
「辛」ぼうすれば
心棒が
一本増えて
「幸」せとなる

執らわれあるほど

真実が
何にあるのか
わからない

自らに
執らわれあるほど
わからない

釈尊のことば（三七）

―法句経解説―

（一三七）～（一四〇）手むかうことなく罪咎の無い人々に害を加えるならば、次に挙げる十種の場合のうちのどれかに速やかに出会うであろう、

――①激しい痛み、②老衰、③身体の障害、④重い病い、⑤乱心、⑥国王からの災い、⑦恐ろしい告げ口、⑧親族の滅亡と、⑨財産の損失と、⑩その家を火が焼く。この愚かな者は、身やぶれてのちに、地獄に生まれる。

解説はほとんど要らないほど、明確です。無抵抗で罪咎のない人に害を加えることを強く戒めているのです。

最近、毎日のようにニュースのトップをかざる、オウム真理教のさまざまな殺人行為は、まさしくこの偈を地で行っていると言えます。

また、原子爆弾の投下による無差別な殺人も、ここでいう手むかいもしないし、罪咎もない老人や子どもまでもに害を加えることになっていると思います。

また、誘拐のように、自分の目的を達するために、罪咎がなく、何ら関係の無い人を人質にとる行為もこの偈に当たると思います。

また、暴力を使わなくても、権力をもつ人が自分を守るために、ことばや行為（約束をほごにしたり、中傷してまわるなど）で自分が権力を行使できる人を傷つけるのも、この偈に該当するのではないでしょうか。

こうした行いは、人をどれほど苦しめ、人の心をどれほど荒廃させるか分かりません。人を信じることができなくさせるものと言えます。

人間は人間を信じることで、社会生活を成り立たせています。お互いが信じられないようになって行くとき、その社会は崩壊へと進んでいくのです。家族でも、会社でも、学校でも、宗教団体でも、民族でも、国家でも、すべて同じです。

いま、日本だけではなく、世界中であらゆる権威が失われ、人々がお互いに信じられなくなっています。信じるのは、人ではなく財産や科学・技術や権力だけになってきているのです。そして、自分を絶対化しています。それは、自分の属する集団を絶対化するということでもあります。つまり、自分の家族、自分の国、自分の民族、自分の宗教を絶対化するのです。そうすることで、自分の精神生活を維持しているのです。

この偈に言います「手むかうことなく罪咎の無い人々

に害を加える」可能性は、自己を絶対化するほど高まります。現代は、残念ながら世界中がその方向に進んでいるように思われます。

それは、あらゆる人が不幸になって行く道であり、人類が滅亡へと進む道だと思うのです。この偈を肝に銘じて行きたいと思います。

（一四一）裸かの行も、髷（まげ）を結うのも、身が泥にまみれるのも、断食も、露地に臥すのも、塵や泥を身に塗るのも、蹲（うずくま）って動かないのも、――疑いを離れていない人を浄めることはできない。

この偈の「裸かの行」から「蹲（うずくま）って動かない」までの記述は、釈尊の時代にインドで行われていたさまざまな修行の形態を言っています。それも、どちらかと言えば、苦行に属するものと思えます。

ですから、この偈で言いたいことは、人ができないような、いろいろな苦行をしても、その人の精神が「疑いを離れていない」ならば、その人を浄める効果は期待できない、ということを言っているのです。

では「疑いを離れていない」とはどんなことなのでしょうか。疑いを離れるということですから、疑うことの反対のことばが意味されています。それは勿論、信じることです。では、信じるとはどんなことなのでしょうか。

昨年の本誌八月号、巻頭シリーズの『老子』解説で、第二十一章を取り上げましたが、その最後のところに、「その精はまさしく「真」です。その中に「信」があります。」とありました。お持ちの方は、そこをもう一度確認してみて下さい。その解説によりますと、この信はまさしく人間「精神」の精（自己）と神（他己）との弁証法的統合に関係したことなのです。自己を信じることと、他己を信じることとが自分自身のなかで可能となり、かつ、それらが統合されるのです。

さらに、昨年十一月号の『老子』解説第四十一章でも次のような記述がありました。「上士と呼べる立派な人は、道を聞けば勤めて実行します。中士と呼べる人は、道を聞いても『半信半疑』です。下士と呼べる人は、道を聞くと馬鹿にして大笑いをします。でも、こうした人に笑われないようでは、道とは言えないのです。」

これに直接関係した解説部分を抜き出しますと、次のようになります。

「人間は自己と他己のバランスが大切です。バランスが取れている人は、他者の言葉にも敬意を払って素直に

耳を傾けることができますが、しかし、それに振り回されてしまうわけではありません。自分を見失わないだけの芯の強さも持っているのです。ですから、人から善い話をきいて感動しますと、それを実際に実行に移すことができるのです。それだけの判断力と実行力を持っているのです。／／ところが、自己と他己のバランスの悪い人や統合の弱い人は、聞いたり読んだりしたときはそうだと思うのですが、いざとなると、そのことが自己に統合されていませんので、実行力が伴わず、『半信半疑』になってしまうのです。／／さらに、バランスの崩れが大きい、自己への執らわれを強く持っている人、普通の言葉で言えば、エゴイスティックで、わがままで、傲慢で、独りよがりの人では、自分の「からだ」でできなかったり、「あたま」で分からなかったり、あるいは「こころ」で自分の損得や好き嫌いに関係ないことは、馬鹿にして笑いとばすのです。」

現代人は、いま、信じるものを失っています。釈尊やキリストの生まれ変わりだなどと言う人が、釈尊やキリストがしてはならないと仰ったことを、平気でしています。それは、信から言えば、その反対の極致にいて、ただ自己を絶対化しているだけなのです。本当に信じていれば、生まれ変わりだなどと言わなくてもよいのです。

読者とのエコーミュニケーション

俳句

○夕映えの青田にビルの並ぶ影
○風鈴と並びて風を待ちいたり
○しらじらとかさなりあいし竹落葉

（徳島県・須藤一樹）

初夏雑詠

○天地の咫尺を受けて早苗立つ
○さずかりし命貴くほたる舞う
○くちなしや老はしつれど吾亦人

（阿南市・片田月牙）

（中塚注）咫尺とは「しせき」と読み、意味は次の通り。①きわめて短い距離、また、長さ。②ごく近くまで接近する、拝謁する。③わずか、僅少。

先日、関西のある読者の方からお手紙を頂き、お会いする約束をして、わざわざこちらにおいで頂きました。

また、東北の最近読者になったある若い女性の方からお手紙を頂きました。悩みを吐露するものでしたが、私なりに、お返事を差し上げました。皆さんもどうか、なんでも結構です、お便りください。

後記

一、私は、健康のためもあり、去年の夏頃から寝る前に梅酒を薄く薄めてコップ一杯～二杯飲むことにしています。昨年は六升ほど梅の焼酎漬を作りましたが無くなり、既成のものを買い足しました。そんなことで今年は、二斗ほど漬けました。

二、最近、キリスト教関係の本と、哲学的な時間論の本を読んでいます。時間とは何なのか、哲学的に考察するのはなかなか難しいようです。私は、時間は自己と他己の弁証法的統合だと考えています。無意識の「生命蔵識」と「如来蔵識」とが統合されるとき、私たちは時間を超えて永遠に至ることができると考えます。

三、この考えをいつか論文にすることがあると思います。本誌でもできたら紹介したいと思います。

四、最近ある人から聞いた話ですが、ある国立大学の教員養成系学部では、近い将来、いま進みつつある中央集権から地方分権への政治改革や規制緩和などの政策の一貫として、国立大学も公立大学へ移管され、縮小されるという噂が流れ、誰がクビになるか業績の査定を真剣に考えはじめているということです。

五、大学単位で、その大学がどんな弟子を育てているか、とかどんな研究業績をあげているかなどを評価する基準を作り、世界中の大学のランキングを出しているアメリカの学者がいます。

六、それによりますと、日本の大学は東大が最高ですが、でも世界の順位で言えば、百位にも入らないそうです。

七、これまでも大学のことは、いろいろ書いてきましたが、いま東大ですら、「ごますり」と「なまけ」が蔓延し、大学教員は研究も教育もいい加減にし、政治に力を入れているそうです。いま、大学の政治は、好き嫌いや損得で動いています。真や善や美や聖を追求すべき大学すらがそうなっていることほど、悲しむべきことはありません。大幅な人員の刷新がいるのではないでしょうか。

月刊　こころのとも　第六巻　七月号（通巻六十七号）

平成七年七月八日
〒772―8502
徳島県鳴門市鳴門町高島
鳴門教育大学　障害児教育講座気付
（ひびきのさと　沙門）中塚　善成（ぜんじょう）

本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名　ひびきのさと　口座番号01610―8―38660